

— シリーズ —



再

発

見

「くねつが再発見」は、広報「くねつが」の平成17年（2005年）5月号から連載しました。「わが町・訓子府の歴史を振り返り、未来への飛躍を誓おう」と始まったシリーズです。

開町100周年の節目を迎え、本物語で再掲載します。

広報「くねつが」に掲載したままの文章および写真の掲載を基本としていますが、加筆・修正し、掲載しているものもあるほか、調査等できた範囲内で、現状の内容を※印で紹介している回もあります。

No.1 「訓子府」は「クンネプ」(2005年5月号)

わが町の名前「くんねつぷ」は、町史をはじめ、訓子府の歴史を記したさまざまな書物に「クンネップ」アイヌ語からきており、黒い(暗い)ところ(川)」という意味であると説明されています。

アイヌ語地名に詳しく、「くんねつぷの文化財シリーズ第8集・訓子府町のアイヌ語地名」を執筆した北見市の「麦の風文庫」主宰・伊藤公平さんによると、「アイヌ語地名は、江戸時代の人がその音を字にしたもの。カタカナ表記した場合『クンネプ』『クンネフ』『クン子ツプ』。『クンネツプ』は、アイヌ語クンネプが訓子府と漢字表記された以後の読み方と思われます」と説明しています。

漢字表記は、明治8年以後、国の施策の一環でアイヌ語の村名が漢字に充てられてきたようですが、「訓子府」となった経緯は「調査中」(伊藤さん)と言います。

「訓子府」の開拓の礎、北光社移民団が入地した「クンネツプ原野」は、古い地図では現在の西19号線から西35号線までが「クン子ツプ原野」と示され、明治24年の北海道庁の原野区画として公表されたようです。地名には多くの歴史があってもしろいですね。



## No.2 村章として、まず決定 「町章・㊦」(2005年6月号)

町章(㊦)は、いわゆる町のシンボルマークです。

続訓子府町史によると、町制が施行された昭和26年11月1日の記念式典に併せ、町章が制定されたと書かれています。

町章の外回り模様は、北の文字をデザイン化し、同時に北海道、北見地方を表し、中央の「訓」は訓子府の頭文字で、五つの円を組み合わせ、町民の相互協力を表しています。

役場にある資料を改めて調べてみると、町制が施行される半年前の昭和26年4月に印刷された訓子府村史の表紙に印刷されていることが分かりました。

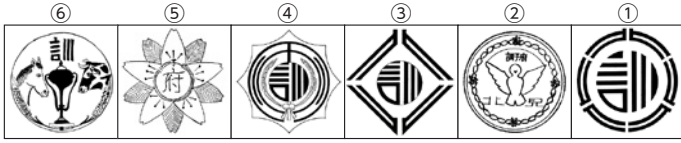
さらに調べると、「村章」として一般公募していました。役場OBの方など多くの先輩方の話を総合すると、昭和25年6月1日の開村30周年記念日と村史の発刊に向けて公募し、当時助役だった池岡正俊氏が、最終的にデザインしたようです。

一度村章として決定し、町制施行によって町章として制定されたようですが、村章決定を記述したものは、今のところ見つかりません。

今回は、公募された村章のデザインなどを紹介する予定です。



No.3 訓子府の発展願い応募 「町章・㊦」(2005年7月号)



村章として公募した作品は、村内や北見市などから66点あり、役場に「永年保存 訓子府村章応募作品綴」として保管されています。作品の一部を紹介します。

①現在の町章の原型になったものと思われます。北海道、北見の「北」各三つで外周りを囲み、「田満で平和な訓子府」を表しています。

②外形は木材の断面を表し、稲を圖案化し、平和の使者・鳩を中心に「平和な村」をイメージしています。

③北海道、北見の「北」を外側にし、訓子府の「訓」を丸く圖案化しています。

④外周は、「八尺の鏡」(天皇家の象徴とされた三種の神器の一つ)とし、丸は平和(輪)を表しています。

⑤外側は、日本の象徴または、平和を表す花・桜をイメージしています。平和な訓子府を意味しています。

⑥稲と麦を描き、訓子府の農作物を表し、牛馬は畜産が盛んであることを表しています。中央のカップは、すべての点で他町村よりすぐれていることをイメージしています。

いろいろなデザインがありますが、訓子府の平和と発展の願いを込めているのは共通しています。

No.4 町章の直径は72mm 「町章・㊦」(2005年8月号)

町章には、基本となる大きさがあり、役場にその基本形を永久保存しています。

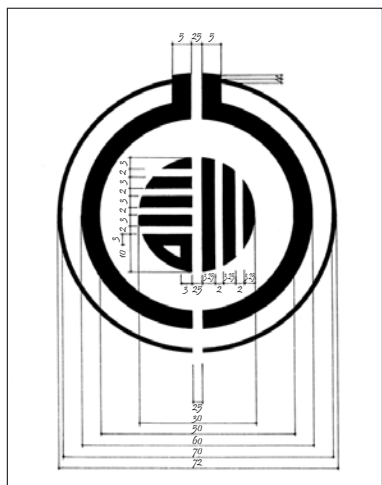
外周の直径は、72mmで、線の太さは1mmです。内周の太い線は、5mmの太さで直径が60mmとなつています。

「訓」の文字の太さは、縦線が3・25mm、横線が3mmで、直径が30mm。

この基本形を拡大・縮小して町史などの各種印刷物や町旗、マンホールのふたなど、さまざまなものに活用しています。

村章として公募し、町制施行の昭和26年11月1日に町章として制定されました。同日は、役場庁舎の落成と公民館の開館記念式典も併せて行われました。

同じ年には、町制施行を記念した「訓子府小唄」「訓子府音頭」が作られ、レコードも制作されました。また、この年、「道立農業試験場北見支場の移転拡充構想が発表され、北見市、美幌町、訓子府村三つどもえの誘致合戦を繰り広げた」(訓子府町史) 一方で、町の歴史が大きく変化した年でもありました。



## No.5 苦難の歴史を伝える木碑（2005年9月号）

訓子府町の基礎を築いたのは、高知県からの北光社移民団。入植の記念碑として「旌頌碑」が、居武士小学校東側にありますが、ここより西側、山上マテック(株)訓子府工場（※現會澤高圧コンクリート(株)訓子府工場）敷地内の常呂川堤防近くに入植の木碑が建てられています。

木碑は、直径約30cm、高さ約2m。高さ30cmほどのコンクリートの台座の上に建ち、削り取った丸木の表面には「大谷清虎 馬場正吉 入植地跡」と彫られています。平成8年7月29日に完成しました。

山上マテックの協力を得て日出実践会地域の方々が生建てたそうです。呼び掛けたのは、訓子府町出身で東京都在住の日大医学部助教授、泉琢磨たくまろさん（※現訓子府町日出在住）。「開拓百年の平成8年に地域として何か残しておくべきと、地域史と木碑を事業としました」。

木碑が生建てしている周辺に大谷、馬場両氏の住宅があったと、泉さんが以前から地域の古老などの話を聞いていたそうです。このことは「開拓百年の歩み 日出史」にも記されています。

大谷、馬場両氏ら13戸45人が、この地域に入ったのは明治30年5月8日。クンネップ原野と呼ばれていました。ひっそりと建つ木碑を見ると、苦難の開拓の歴史などが思い浮かびます。



No.6 「大地くん」、ムシキング人気で脚光？（2005年10月号）

「ふるさと大地くん」を知っていますか。町産業観光振興協議会が、平成元年に地場産品PRのために作ったイメージキャラクターです。

クワガタを圖案化したもので、この広報「くんねつぶ」の編集後記でも使っているほか、マンホールのふたやレクリエーション公園の階段などでも見掛けます。

イメージキャラクターであることが、忘れられつつありますが、クワガタが戦うテレビゲーム「ムシキング」で、子どもたちに再び脚光を集めています。

イメージキャラクターの選定は、公募して集まった137点のイメージに専門家の手を加え、決定しました。

クワガタについては「本町に生息数が多く、特に子どもたちの人気者、大自然を象徴し、ふるさとを表現している」ことが採用理由で、名前は「大自然の夢を届ける」イメージから「ふるさと大地くん」と付けられました。

このキャラクターの原形には「緑・太陽・銀河線の街」の文字が入っています。クワガタの人氣が上昇しましたが、銀河線の廃止が決定し、大地くんも寂しそうです。



## No.7 緑と潤いあふれるまちに、町木・町花制定（2005年11月号）

皆さんご存知のことと思いますが、町の木は「オンコ」、町の花は「エゾムラサキツツジ」です。

この二つは、町の「開基80周年記念事業」の一つとして町民憲章推進協議会が決めました。

自然と触れ合う、生活に潤いを与えるなど環境緑化推進のまち

づくりの一環として、制定に向けて昭和52年に町民アンケートを実施しました。

町の花は「庭先に気軽に植えられるもの」、町の木は「訓子府町に古くからある木、シンボル（象徴）的なもの」を基本的な考え方として募集した結果、木はオンコ、ナナカマド、シラカバが全体の25%から30%、花はツツジが40%を占めました。

町民憲章推進協議会では、アンケートを基に、町議会と協議し、同年10月2日の開基80周年記念式典で制定披露を行いました。

披露したのは、当時小学6年生だった松永諭さんと今佳奈恵さん。松永さん（東京都在住）は「訓子府を離れて20年以上になります。年に一度帰省していますが、自然が豊かで昔の面影を残してくれていることにほっとしています」、今さん（現姓・褓田〓ほろた〓、上川管内和寒町在住）は「大勢の中で披露して緊張した記憶があります。いつまでも自然を大切にしてほしいですね」と話し、二人とも訓子府の発展を願っていました。





No.8 役場の職員、分村時は10人でスタート(2005年12月号)

置戸村から分村して訓子府村となったのが、大正9年(1920年)6月1日です。

訓子府村史や訓子府町史によると、分村時の職員数は、初代村長の山崎亮智氏を含め8人、給仕、使丁(用務員)の雇人(臨時職員)2人で事務を開始しました。

機構としては、第一科と第二科があり、第一科には、勧業、土木、庶務、教育、衛生、兵事、戸籍、兵事勸業係、第二科には税務係があったことが記されています。

町制が施行され、訓子府町になったのが昭和26年(11月1日)。町に保存されている辞令簿によると、この年の職員は、町長・助役・収入役の特別職3人と一般職が36人でした。係は、総務・税務・財務・出納・社会・教育・戸籍・農林・畜産統計・商工・土木となっています。

ちなみに、大正9年の村長の給与は、月55円、昭和26年の町長の給与は2万2,000円でした。同時期の白米の値段を見ると、大正8年の東京での白米小売価格が10kg3円86銭(値段史年表 明治・大正・昭和 週刊朝日編「朝日新聞社発行」、昭和25年では440円(同)となっています。人口は、分村時6,592人、町制施行時1万925人でした。

現在の役場の機構は、7課1室31係、職員数は114人(11月1日現在、特別職・消防含む)となっています。

※令和2年4月1日現在、18課(室等)45係 125人(特別職3人および消防職員含む)

No.9 希望に満ちたまちづくりを進める町民憲章（2006年1月号）

美しい緑の野山につつまれ、常呂川の清い流れにそって、発展してきた訓子府町には、いまま先人のたくましい開拓精神が生きています。わたしたちは、いつまでも郷土を愛し、大きく伸びる訓子府の町民であることに誇りをもって、この憲章を定めます

これは、町民憲章の前文です。町では「自分たちの住む郷土には、だれでも愛着があり、住みよい郷土の限りない発展を願っている」との考えから、この願いを「町民憲章」として表そうと、大正9年に置戸村から分村し、満50年を迎えた昭和45年6月に「訓子府町民憲章起草審議会」（委員5人）を立ち上げました。

審議会では、制定市町村（当時管内では、10市町村が制定）の文例検討や町民憲章の考え方を全町民に問い掛けるなどして、案をつくり答申。同年7月18日の町議会で制定の同意を受け、8月1日に制定告示しました。

前文に続き、5項目の憲章（広報表紙参照）※現在カレンダーのページに掲載）を制定しています。前文そして、それぞれの項目に趣旨が付けられ、いずれも自然と先人に感謝し、未来に対する「心のよりどころ」としています。町の法律でもある町民憲章を改めて考え、暮らしに生かしていきたいでしょう。



No.10 多くの歴史刻む妻恋橋と叶橋（2006年2月号）

「むかし、この川が氾濫して、夫婦が兩岸に別れ別れとなったため、夫が妻の身を想って幾日も幾日も鹿笛を吹き続けたという言い伝えから、古い橋の名を妻恋橋としました」

町を南北に分断している常呂川に架かる叶橋。冒頭の言い伝えから、もともとは妻恋橋と呼ばれていました。この言い伝えは、叶橋に設置された高欄パネルの1枚に記されています。

妻恋橋は、明治42年道道相内陸別線開削の際、木橋として完成しました。現叶橋の少し上流。この妻恋橋は、昭和9年に叶橋に生まれ変わりました。水害で流出の被害を繰り返していたため、コンクリートの永久橋建設の要望が強かったためです。

このとき、建設に尽力した当時の網走土木事務所（※現オホーツク総合振興局網走建設管理部）の所長の名前にちなみ、かつ地域の長年の願いが叶ったという意味が込められ、名付けられました。

町開基100年の平成8年に現在の叶橋が完成。さまざまな歴史を刻み、妻恋橋の名も抱え、町の発展に大きく貢献している叶橋。

現在、妻恋橋の名は、地酒に付けられている（※現在は生産されていません）ほか、町制施行の昭和26年にできた「くんねつぶ音頭」の歌詞に盛り込まれています。



No.11 絵地図で昔の訓子府を見てみましょう（2006年3月号）

昭和24年の街並みは？

くんねつぶ歴史館に、この当時の中心市街地を描いた地図があります。「訓子府村市街絵地図」で、訓子府町高園出身の谷口修平さん（横浜市在住）から寄贈されたものです。

市街地を真上から見た形の地図の大きさは、縦100cm横80cmで、北は南10線、南は常呂川辺り、東は常照寺付近から西は若富町の最勝寺付近までの範囲。

地図を見ると、駅前や道道北見置戸線などにさまざまな店舗が並び、戦後徐々に発展してきた様子が見えます。また、現在の役場庁舎や中学校周辺は、地図ではまだ畑でした。

消防支署は、同じ場所で「消防番屋」と記され、「馬車屋」など時代を感じさせる店もありました。

谷口さんは、大学卒業後ソニーに入社。デザイン会社を経営するなど、工業デザイナーとして活躍しています。「6、7年前に訓中の同窓会で、友人たちと当時の地図があったらいいなど話が出て、小学校5、6年生ごろの記憶を頼りにパソコンで作りました」と話していました。

歴史館では、訓子府の昔を知る資料として、観覧を呼び掛けています。



No.12 居小開校90周年、歴史物語る校門（2006年4月号）

訓子府開拓の礎、北光社移民団が入った地、大谷地区（当時訓子府原野オロムシ）に建つ居武士小学校が、今年開校90周年を迎え、11月に記念式典が行われます。

居小は、大正5年に訓子府小学校所属居武士教授場として開校したのが始まりです。それまでこの地域の子どもたちは、明治34年に現在の北見市上ところに開校した訓子府小学校（現上常呂小学校）へ通学していました。さらに、当時の野付牛村から訓子府が所属する置戸村が分村し、現在の訓小に通学区域が変更され、より遠距離になったことなどから、地域住民の方の尽力で小学校開設に至りました。

その後、何度も増築、改築、新築が行われました。現校舎は、昭和54年に落成しました。現校舎を見守る古い校門が、学校菜園の場所に建っています。

門柱の裏側には「昭和拾七年拾月」と刻まれており、昭和17年に2代目の校舎が誕生したときに建てられたものです。当時の校門が残されたのは、現校舎落成と居小創立65周年記念事業協賛会が、歴史を保存しようと、校舎新築の際に移設保存したそうです。

訓子府の歴史発祥の地でもある「オロムシ」の教育の歴史を語る校門です。



No.13 銀河線別ルートに市街予定地跡（2006年5月号）

町の南西部で、置戸町、十勝管内陸別町と接する常盤地区。ここに教育委員会が平成3年11月に設置した「市街予定地跡」の史跡標示板があります。

続訓子府町史には、「鉄道通過の候補地であったと伝えられる」と、記されています。

鉄道とは、4月に廃線となったふるさと銀河線の前身、網走本線とも言われています。網走本線は、訓子府開拓の礎・北光社移民団の幹部だった澤本楠弥、前田駒次両氏らの尽力で敷設されましたが、町史などによると、計画段階で十勝管内池田―網走間のルートが陸別から津別、美幌を抜け、野付牛（現・北見市）を通らないという風評もあったといわれています。

この津別、美幌ルートの風評が常盤地区に市街地形成の構想を浮上させたのかもしれませんが。

訓子府の現在の市街地は、明治44年に訓子府駅が開設されてから急速に発展しました。もしかすると、このような市街地が常盤地区にできていたかもしれませんね。

※史跡標示板は現在新しくなっています。



No.14 訓子府の面積、レク公園700個分(2006年6月号)

訓子府町の面積は、190・89<sup>2</sup>km<sup>2</sup>です。国土交通省国土地理院が公表しています。町史などの資料にも記されています。

さまざまな資料で面積の推移を見てみると、明治30年、常呂外六か村戸長役場から、野付牛外一か村(旧北見市・訓子府町・置戸町・留辺蘂町のエリア)戸長役場時代に入ったときの面積は、1,866<sup>2</sup>km<sup>2</sup>でした。

また、訓子府地域を含む置戸村が大正4年に分村したときの置戸村の面積は、720<sup>2</sup>km<sup>2</sup>、大正9年に置戸村から訓子府村として分村したときは、現在とほぼ同じ190・15<sup>2</sup>km<sup>2</sup>でした。

市町村合併前の網走管内26市町村の中では、5番目に小さな面積でしたが、昨年と今年3地域で合併が行われ、訓子府は2番目に小さな面積になりました。

市町村自治研究会編集の全国市町村要覧17年版(国土地理院公表平成16年10月1日現在)では、全国2,239市区町村の629番目の広さとなっています。北海道の市町村面積が本州などに比べて、いかに広いか分かります。

皆さんがよく利用されているレクリエーション公園は27haで、この約700倍の広さが訓子府町です。

※国土地理院の平成26年全国都道府県市区町村別面積調で190・95<sup>2</sup>km<sup>2</sup>に変更となりました。また、現在はオホーツク管内で最も面積が小さい自治体となっています。

## No.15 町の歴史を見つめ続ける保存樹木（2006年7月号）

未開の大地に開拓の跡が下ろされてから110年が経過しました。原生林の面影を残している地域もあります。

開拓当時から原生木やこの地に移住した記念に植栽された樹木などが多数あり、町教育委員会は町の保存樹木として指定しています。

現在指定されているのは、14か所24本（※令和2年8月1日現在13か所23本）です。このうち訓子府小学校校庭にあるハルニレ3本とカツラ1本は、町の歴史とともに、子どもたちの成長も見守っています。4本は、いずれも樹齢250年以上とされる原生木です。昭和60年10月1日に保存樹木になりました。

これまでに訓子府小学校を巣立っていったのは、1万1,000人を超えています。卒業生たちは、胸に樹木の思い出を刻み、学び舎と同じくらいにニレの木に親しみを持っていることと思います。

北の大地でたくましく生きてきた多くの樹木。今後も町のさまざま  
な歴史を見つめていくのでしょうか。



※このニレの木は平成28年8月17日の台風7号の強風で幹折れし、安全のため翌日伐採しました。訓子のシンボルだけに、11月1日には開基120年記念事業として同じ場所にハルニレの木を植栽しました。



No.16 訓子府の歴史に名を刻むエレコーク（2006年8月号）

このシリーズの第1回目に訓子府の地名についてアイヌ語からきていることを紹介しましたが、北海道の地名にはアイヌ語から付けられているところが多く、北見地方もアイヌ民族との関わりが深いことがいろいろな史実で分かります。

訓子府町実郷の道道沿いに、町教育委員会が昭和62年に設置した「平村エレコーク住居跡」の標示板があります。エレコークについては、訓子府町史をはじめ、北見市史や置戸町史にも記されています。

エレコークは、明治19年ごろ東京の狩猟者とともに日高支庁（※現日高振興局）平取町から、オロムシ地区（※現訓子府町大谷）に入り、この地方で狩猟生活をしていたそうです。

町教委が、日出に住むお年寄りから、現在の標示板の立つ辺りにエレコークの住居があったことを聞き、標示板を設置しました。

エレコークは、廃線となったふるさと銀河線の前身、網走本線敷設の実地踏査の際に関係者を十勝管内池田町まで道案内したり、網走監獄を逃げ出した凶悪犯と格闘し、北海道庁長官から感謝状を受けたという逸話もあり、この地方の歴史と深いつながりがあったことが分かります。

※史跡標示板は現在新しくなっています。



No.17 訓子府消防が誕生して90年㊤（2006年9月号）

訓子府町史や訓子府消防史などによると、訓子府消防の組織自体は、公設消防組が設置される前の大正2年、マッチ軸を製造する草野製軸訓子府工場が、手押しポンプ1台を備え、工員を訓練して万が一に備えたことが始まりと記されています。

その後、大正4年の草野工場の火災を機に私設訓子府消防組が組織され、翌5年に公設消防組が設置されました。この公設消防組の設置を現在の訓子府消防団の始まりとして今年90年を迎えました。この公設消防組は、警察当局の指揮監督の下で活動していました。昭和12年には、戦争などの対応のために防護団が結成され、昭和14年に消防組と統合し、訓子府村警防団が設置されました。

昭和23年に市町村長が管理する自治体消防に移行、同47年には訓子府町のほか、北見市、端野町、置戸町1市3町の北見地区消防組合が誕生。現在は、平成18年3月5日に北見市、端野町、留辺蘂町、常呂町と合併した「新・北見市」と訓子府町、置戸町の1市2町に再編されています。

訓子府消防90年記念として懐かしい写真や古い消防用具などを来年3月末までくんねっぶ歴史館に展示しています。

※消防用具は一部常設展示しています。



No.18 訓子府消防が誕生して90年㊦（2006年10月号）

現在、消防団員は105人、消防職員は14人います。消防車両は、訓子府支署、消防団合わせで9台（広報車など含む）、救急車は1台所有し、住民皆さんの生活の安全を守り続けています。消防設備の一部として欠かせないのが、サイレンです。大正5年の訓子府消防組創設時から昭和9年までは、サイレンではなく「半鐘」と呼ばれる鐘が使われていました。

半鐘とともに、消防のシンボルと言えるのが火の見やぐら（望楼）です。消防組創設時は、現訓子府支署庁舎近くにはしご造りの火の見やぐらが建てられ、その頂上に半鐘が設置されました。訓子府消防史によると、火の見やぐらは木造のため、たびたび修理されましたが、昭和9年には530円で鉄骨造りとなり、同時に半鐘に代わってサイレンが備え付けられたと記されています。

サイレンは時報にも利用され、火災などを知らせるほか、住民の方の日常生活の一部にもなりました。

当時使われていた半鐘が、訓子府支署庁舎玄関横に今も残っており、訓子府消防の歴史を見守ると同時に、防火思想の普及に一役買っています。この後ろには20mの望楼がそびえています。

※令和2年8月1日現在、団員100人、職員15人、車両10台となっています。



No.19 静寂せいじゃくと轟音ごうおんの流れ持つ常呂川（2006年11月号）

訓子府のまちを西から東に流れる常呂川。この流れは、豊かな大地を生み出しました。時にはその大地に牙を向けることもあり、今年8月と10月の大雨で大きく増水したことで、洪水の恐ろしさを垣間見ることができました。

網走開発建設部が発行した北見河川事務所30年史などによると、常呂川は、置戸町鹿ノ子ダムの奥、大雪山系三国山（標高1,541m）にその源を発しています。全長120km、流域面積1,930km<sup>2</sup>。

置戸町から訓子府町そして、北見市北見自治区で同じく訓子府町を流れる訓子府川と合流、さらに北見市留辺蘂自治区から流れてくる無加川とも合流し、北見市端野自治区を経て、北見市常呂自治区でオホーツク海に注いでいます。

さまざまな資料では、常呂川は明治時代から大雨などで氾濫を繰り返し、流域に大きな被害をもたらし、その都度川の流れを変えていると記されています。流域では、こうした自然災害の脅威と、川がもたらす多種多様な恵みという、常呂川の相反する素顔を長い歴史の中で見つめ続けています。



No.20 駒里に地震観測点、予知研究のデータに④（2006年12月号）

地震、風雨そして竜巻など、今年は身近なところで自然の脅威を見せてつけられています。その脅威の一つ、地震の観測点が駒里にあります。

北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センターが昭和60年4月に設置しました。道内に同様の観測点が46か所あり、その中の一つです。

同センターの一柳昌義技官によると、人が感じないような微小地震を検知する地震計と地震予知のために地殻変動を観測する計器が設置されているそうです。「道内他地域の地震計とともに、道内で発生した地震の震源を決定するためなどに設置し、24時間電話回線でセンター、さらに札幌管区気象台にデータが送られます」と言います。

観測されたデータは、震源決定や、地震活動についての研究材料となっているほか、気象台から地震情報の各機関へ提供されています。

「この地震計は微小地震を記録するもので、震度情報のためのデータとしては利用していません」（一柳さん）。震度を示す強震計は役場敷地内に北海道が設置しており、地震が発生した場合、庁舎内の標示板に震度が記されます。



No.21 駒里に地震観測点、予知研究のデータに㊦（2007年1月号）

駒里にある北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センターの観測点。昨年12月号で、微小地震を検知する地震計と地震予知のために地殻変動を観測する計器が設置されていることを紹介しました。

同センターの一柳昌義技官によると、この地殻変動を観測する計器は、「ひずみ計」と「傾斜計」が設置されているそうです。ひずみ計は、地面の伸びや縮みを計り、傾斜計は地面の傾斜を計るものです。

これら計器は、駒里に建てられている観測所内のトンネルの中にあります。「トンネルは岩盤の中に向かいY字型になっており、Yの両端と観測所側入り口に向かって、ひずみ計、傾斜計を3セットずつ設置しています」（二柳さん）ということです。

同様の観測点は、太平洋沿岸と苫前町（留萌管内）、愛別町（上川管内）にあり、苫前町から訓子府町に向かって一直線になっています。また、駒里地区は岩盤が固くしっかりし、地震波が伝わりやすいことから、本町駒里に設置したそうです。

本町でのデータが大地震を予知する研究に活用され、予知が実現できるようになればいいですね。



No.22 町内の橋の総延長は2・3 km (2007年2月号)

訓子府町内に橋はいくつあるのでしょうか。町内を流れる河川に架かり、道と町が「橋梁」として管理しているものは、合わせて139橋あります。(平成19年1月1日現在)。

町が管理している町道上にある橋は、98橋あり、延長が最も長いのは、穂波橋Ⅱ写真Ⅱで165・7m、叶橋が150・7m、清住橋が128・2mと続きます。また現在架け替え中の中の沢橋は約5m長くなり、52mとなります。

道道では41橋で、長いのは日の出橋が164m、訓子府大橋が158mです。道道、町道合わせて最も長いのは穂波橋になり、最も短いのは2m(橋梁とされる最低延長)で、道道、町道合わせて6橋あります。

町内の橋の総延長は、2,343・57m(町道1,372・57m、道道971m)となっています。

このほか、昨年4月に廃線となったふるさと銀河線の橋、つまり鉄橋は町内に7橋(※平成18年に全撤去)あり、総延長は35・38mです。

※令和2年8月1日現在、139橋で総延長は2・349kmです。穂波橋は、令和2年度長寿命化工

事が完了しました。

